

M

2007(平成19)年10月12日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督=廣木隆一/脚本=斎藤久志/原作=馳星周『M』(文春文庫刊)/出演=美元/高良健吾/大森南朋/田口トモロヲ(ハピネット配給/2006年日本映画/110分)

……女の性を描き続けてきた廣木隆一監督が、美形モデル美元を起用した『M』は、問題提起がいっぱい……。一見幸せで穏やかな家族だが、セックスを伴わない夫婦のつながりは心細いもの……。出会い系サイト、エロサイト、CD-ROM、ヤクザ、売春そして殺人、人生って、こんなにいとも簡単に変わっていくものなの……。現代に生きる多くの女性もつ不安を見事に描いた佳作から、さてあなたは何を学ぶことが……？

美元とは……？

この映画の試写案内を見たときは、誰のどんな映画かサッパリわからなかったが、みをん美元という女優の顔と名前を見てこれは絶対観なければ、と思ったもの。一瞬中国人かと思ったが、彼女は父親が日本人で母親が韓国人の2世で、2000年度準ミスユニバースジャパンを受賞後、モデルとして活躍を続け、今回はじめて演技に挑戦したとのこと。

丸顔の愛くるしい顔をした私好みの美女だが、準ミスに選出された後7年間もモデルとして活躍しているとすると、1979年生まれの場合は既に28歳。もっともこの『M』で彼女が演ずる人妻小川聡子は28歳という設定だから、年齢的にはピッタリ。しかし……？

美形モデルが体当たりですごいシーンに初挑戦！

今の時代、女の28歳のバリエーションは広い。昔は結婚して子供1、2人というのが平均パターンだったが、今は男には興味なしというスタンスでキャリアウーマンと

してバリバリ働いている女性や、そこまでいなくても OL 生活を続けボチボチ見合
いでもと考えている女性の方が多いかも……？ また、最近はいまだに両親に扶養さ
れている女性も増えているらしい……？

『M』における聡子は1人の男の子をもつ母親で、夫の秀之（大森南朋）と共に標
準より少し上のレベルで幸せな結婚生活を過ごしている女性、のはず……？ ところ
が実はそれは表面上だけの姿で、まだ28歳という女盛りの聡子だったが、既に秀之か
らは女として見られなくなり、セックスもなくなってしまっているらしい……？

この映画は、そんな不満から聡子がつい「28歳ってオバサンですか？」と出会い系
サイトに書き込みしたことがきっかけとなって大きく道を踏み外していく姿を描いた
もの。したがって、スーパーモデルの美元がヌードシーンはもちろん、杉本彩の『花
と蛇』（04年）とまではいかないものの、SM 的かつかなり刺激的なシーン（？）に
体当たりで初挑戦！ まずは、そんなスケベ心をもってこの映画を……。

馳星周と廣木隆一をはじめて

この映画の原作は、馳星周^{はせせいしゅう}が1992年にはじめて書いた中篇集『M』とのこと。1996
年に『不夜城』でデビューした馳星周は、私もその名前をよく知っている作家。その
後『夜行虫』（98年）や『漂流街』（98年）などを書いていることもよく知っていたが、
もちろんその作品を読んだことはない。

他方、この映画を監督した廣木隆一^{ひろきりゅういち}は、『ヴァイブレータ』（03年）と『やわらか
い生活』（06年）で有名だが、この2本とも私は観ていない。また1954年生まれの彼
のデビュー作は1982年の『性虐！ 女を暴く』だし、その後の何ともハデハデしく
エロティックなタイトルをみれば、どんな傾向の監督かすぐにわかるというもの。私
が唯一観た彼の作品は、女、エロスをテーマとした5話のオムニバス映画『フィーメ
イル』（05年）のうち、『太陽の見える場所まで』という作品。そして、それについて
私は、くだらない順の第1位に挙げたもの（『シネマルーム7』313頁参照）。

したがって、私にとってこの映画『M』は作家の馳星周と監督の廣木隆一をはじめ
て体験するようなもの。もっとも4話で構成されている中篇集『M』を映画用に1つ
の物語にまとめ、聡子と聡子に関わる男たちを聡子の視点から描く脚本を書いたのは
齋藤久志だから、この齋藤久志もはじめて鑑賞する人物……。

エリートサラリーマンの孤独は……？

くだらないバラエティー花盛りのテレビ番組の中、久しぶりに高い評価を受けたのがNHKドラマ『ハゲタカ』。不良債権処理という難しいテーマを真正面から見すえたこの名ドラマに、ハゲタカファンド「ホライズン・インベストメント・ワークス・ジャパン」代表として企業買収を指導する主人公鷲津政彦役で主演したのが大森南朋。

その大森南朋が『M』では、セックスレスながら他方で妻の行動に不安をもち、友人から渡されたCD-ROMに映る、目を隠されたエロティックな女の顔に聡子をイメージしてしまう孤独なエリートサラリーマン役を雰囲気たっぷりに演じている。30代半ばにして早くもセックスレスになってしまったのはなぜなのか、それは映画の中からはよくわからないが、同窓会で夜遅く帰って来た妻の口から出る「私、口説かれたのよ」とのセリフはかなり挑発的……？ また、会社から早く帰宅した時、子供と一緒に風呂に入っていた妻がバスタオルを巻いたまま登場してくる中、チラリチラリと見せる白い足もかなり刺激的……？

いったん独占してしまうとその価値が下がってしまうのは世の常だが、今や秀之はそんな不満を風俗嬢にぶつけるしかないようなのは実にかわいそう……。ヤクザの俵(田口トモロヲ)が「とても子供を産んだとは思えない」と言うとおり、聡子の身体は一級品。なぜ、こんなミスマッチになってしまうのだろうか……？ これは大きな社会問題……？

新聞配達の稔はすごいキャラ……

母親に対して暴力を振るう父親を刺し殺したことによって、少年院を経て今は住み込みで新聞配達をしている青年が稔(高良健吾)。ところが、そこまで母親を守ったにもかかわらず、稔はその母親から棄てられてしまったらしい。そんな原体験をもつためか、稔の女性観は独特かつかなり歪められたもの……？

そんな稔がある日河原で目にしたのが、子供を迎えにきた母親聡子と子供と手をつないで帰る聡子の姿。それが、理想的な母親の姿として稔の目に映ったのは当然……？ ところが、仕事仲間から見せられたエロサイトのモニターには、目が隠されているものの、あの母親そっくりの顔が透くような肢体で……。さらに、外出する聡子の跡をつけていくと、何と聡子は柄の悪い男と落ち合った上、1人でラブホテルの

中に。これはやはり……？ 稔がそう思ったのは当然。

ここまでは、なるほどよくあるお話だが、その後はあっと驚く展開に……。自分の主義主張を貫く筋の通った青年といえば聞こえはよいが、その本質は思いつめたら何をするかわからない、というかなり怖いもの。それに比べれば、一定のルールやシステムの上で動くヤクザの方がまだ

安心……？ そんな風に思えるほど、この稔はすごいキャラ……。それは、少年院あがりの昔の仲間たちと共に、ある金持ちのおばさんの店を襲い、そのおばさんをレイプするシーンで一層鮮明に。さて、その金持ちのおばさんとは一体ダレ……？



『M』DVD 絶賛発売中！ 発売元／販売元：株式会社ハピネット 価格（税込）：¥3990

田口トモロヲがハマリ役を……？

足立正生監督の『幽閉者（テロリスト）』（06年）で主演した田口トモロヲの熱演にはビックリさせられたが、彼の本来の才能は、変幻自在にどんな役割でもピッタリと演じ分けられる名脇役の場合に発揮されるようだ。私の印象に残るものだけでも、『大停電の夜に』（05年）や『オリオン座からの招待状』（07年）などがある。

そんな田口トモロヲが、『M』では善良な主婦聡子をうまくたぶらかしたうえ、ホテルに入った後はヤクザに豹変しその本性を丸出しにする俵を実に憎々しく演じている。喫茶店でプリンを食べながらやさしく聡子に語りかける俵は見るからに小心者で人のいいおじさんに見えたのだが、ラブホテルの部屋の中に入り、あることを要求し始めると……？ 真珠の入ったイチモツがどれほどのものかはよく知らないが、なるほど、これが売春によって女に稼がせるプロ集団たちのヤリ口かと妙に納得……。そして、これぞまさに田口トモロヲのハマリ役、と思ったが、実はその感想は彼の場合、毎度のこと……？

メインはスケベ心より心理描写……？

この映画を観る前の私の興味の重点はスケベ心にあった。1980年代、90年代にす

ごいタイトルのエロ映画(?)をたくさん作ってきた廣木監督にその点を期待したのは当然。しかしどうもその点は肩すかしの終わった感じ……。なぜならこの映画は「いざ! これから!」というシーンになりかけると、エッチシーンはそこでパッと途切れ、別のシーンに移ってしまうから。

これは、もちろん美形モデル美元に気を遣った一面もあるが、それ以上に廣木監督のエッチシーンを描く視点が年齢とともに変わってきたため……。つまり、スクリーン上で観客のスケベ心を満足させるよりも、女の性をめぐる微妙で複雑な心理を描くことにより興味の対象が移ったため……。したがって、当然ながらこの映画に、出張先のホテルで見るとようなアダルトビデオ的な楽しみを期待するのは全くナンセンス!

幸せそうなエンディングだが……

美元を起用し、女の性、女の業を描いた廣木監督の問題提起は、その方面の専門家(?)だけに鋭いものがある。ちょっとした好奇心をきっかけに、ヤクザに脅迫されて無理やり売春の道に入りこまされてしまった聡子だが、いつの頃からか、なぜかそれが強制や抑圧ではなく、むしろそれが楽しみとなり性的悦楽の場となってしまった感までも……。さらに、なぜか自分につきまとってくる青年稔が客としてついた時、乱暴に服を破りロープで身体を縛る稔に対して恐怖を感じつつ、他方で感じてしまい、「もっともっと……」と抱きついていく聡子の性は……?

そんな鋭い問題提起に対する答えは、スクリーン上にはもちろん示されない。そればかりか、この映画のエンディングは、聡子が河原で息子とキャッチボールをする夫をやさしく見守っているシーン。つまり、どこにでもありそうな、平和で穏やかな家族の風景だ。

ヤクザの俵を殺してしまった稔は一体これからどうなるの……。また、結果的にその場であれやこれやの役割を果たした聡子は、一体これからどうなるの……。それを考え、またエンディングの風景の危うさを感じとるのが、観客であるあなたの役目。私はそう思うのだが……。

2007(平成19)年10月15日記